

「イーサン・ブランド」を読み直す —ホーソンと「許されざる罪」

尾崎裕子

はじめに

1844年、ナサニエル・ホーソンは彼の創作ノート兼日記帳ともいべき『アメリカン・ノートブックス』(*The American Notebooks*)に、次のような言葉を記した。

許されざる罪は、人間の魂に対する愛情と敬意の欠落にあるのかもしれない。その結果、探求者は人間の魂の暗い深淵を、それをよりよくしようという目的や望みからではなく、冷たい学問的な好奇心から覗きこみ、いかなる種類や程度であれ、それが邪悪であることに満足覚え、それを徹底的に研究し尽くすことだけを欲する。言い換えるなら、これは「知性」が「心」から分離してしまった状態のことではないだろうか。(AN 251)¹⁾

おそらくこのメモは、ホーソンがこの6年後に発表した短編「イーサン・ブランド」(“Ethan Brand”)の執筆のための覚え書きである。「水泡に帰したロマンスから的一章」という副題が物語っているとおり、「イーサン・ブランド」はもともと長編小説として構想されたものだった。しかし作家の奮闘もむなしく、この物語がその構想のとおり形を成すことはなかった。ホーソンはチャールズ・W・ウェバーから、新しく企画している雑誌への寄稿の話を持ちかけられていたこともあって、1848年の年の瀬も押し迫るころ、この未完の作品をウェバーに送り、次のような手紙を添えた。「ようやく、わたしはこの惨めな脳みそからあらん限りの力で一つのアイデアをひねり出し、それをもぎ取りました。いや、正確に言うと、これはアイデアの欠片にすぎません。まるで下手くそに引っこ抜かれた歯みたいに、残った根っこがいまだにわたしを苛んでいます」(L 251)。ウェバーの企画した雑誌は資金不足で刊行されなかった。「イーサン・ブランド」はいったんお蔵入りとなり、約一年後の1850年1月に、「許されざる罪」(“The Unpardonable Sin”)というタイトルでようやく『ボストン・ウィークリー・ミュージアム』紙に掲載されたのである²⁾。

現在わたしたちが手にすることのできる「イーサン・ブランド」のテキストは、おそらく長編小説の締めくくりとなるはずだった章から成っている。物語は、人間が犯す罪のなかで神の無限の慈悲をも超えた最悪の罪とは、いったい何だろうかという思索に取りつかれた主人公イーサン・ブランドが、「許されざる罪」を探して旅をするというものだが、実際に読者が彼の旅物語を読むことはない。作品に描かれているのは、ブランドが旅の目的を果たして故郷に戻ってきたところからであり、彼がどのような旅路を辿って、そこでいかなる変化を遂げたかは、語り手の説明から窺い知ることができるのみである。語り手によれば、イーサン・ブランドは「許されざる罪」を探して18年

ものあいだ世界中を放浪し、赴いた先々で出会った人たちを観察しては、彼らの心に潜む邪悪な本性を分析するという生活を送っていた。はじめのうち、ブランドは生来のやさしさから人間の罪深さに同情し、「許されざる罪」などという恐ろしい罪悪が人々のなかに見つかることを恐れていた。しかし長い思索のなかで彼の知性は鍛えあげられ、いつしかブランドは己の知的好奇心を満たすためなら他人を心理実験の材料にして弄ぶことも厭わないような、冷たい観察者に変貌してしまったのである。人間の魂への敬意と愛情を失ったブランドは、自分自身の無情さこそ長年探しつづけた「許されざる罪」なのだと思い至る。そして人生を費やした探究の答えが自分の内部にあったという皮肉に、絶望の笑いを放ちながら故郷に帰ってくる。故郷の人々は、「許されざる罪」を発見したというブランドの言葉を信じず、彼を狂人扱いする。しかし自分の人生の目的がみごとに達成されたことに満足したブランドは、燃え盛る石灰窯の炎に身を投げて物語に幕を下ろすのである。

「イーサン・ブランド」が小説としてはいわば失敗作であるにもかかわらず、ここでわざわざ取り上げようとしているのは、上記の要約からも知れるように、この作品が「許されざる罪」そのものを扱っているためである。人間性への愛情と敬意の欠落という問題は、1843年に発表された「あざ」(“The Birth-mark”)や、その翌年に発表された「ラパチーニの娘」(“Rappaccini’s Daughter”)といった、「イーサン・ブランド」以前のホーソンの短編にも既に見られた。また、「イーサン・ブランド」と同年に出版された『緋文字』(*The Scarlet Letter*)をはじめとする彼の長編小説群においても、程度の差はあれ、共通して取り上げられている主題である。要するに「許されざる罪」はホーソン文学を貫く一つの重要なテーマとあってよいわけだが、「イーサン・ブランド」は作家がこのテーマを直接的に扱った唯一の例である³⁾。さらに、この作品がもともと長編として意図されていたことは注目すべきことのように思われる。当時、しがない短編作家だったホーソンは長編小説家への道を真剣に模索していた。おそらく彼は、それまで短編のなかで間接的に追究してきた「許されざる罪」の問題を真正面から扱うことで長編の執筆に挑んだのではないかと推測される⁴⁾。つまり「イーサン・ブランド」は、幾らか仰々しい物言いをすると、作家のそれまでの思索の一つの結晶となりえた作品であり、その後の彼の長編小説のちょっとした下地ともなりうる作品と考えることができるかもしれない。「イーサン・ブランド」はこうした意味では特別な作品であり、これをいかに解釈するかは、多かれ少なかれ、ホーソン研究全体に係わる問題とっていいだろう。

これまでの「イーサン・ブランド」に関する解釈を振り返ると、それは大まかに次の二つに分けられるのではないかと思う。まず一つ目は、作品中での語り手やブランド自身の発言をほぼ全面的に受け入れた、もっとも一般的な解釈である。つまり、ブランドはずば抜けた知性と引き換えに人類への同胞愛を失うことで「許されざる罪」を犯しており、彼の自殺はその魂の地獄行きを象徴的に示しているというものだ。たとえばジェームズ・ミラー・Jr.によれば、ブランドの自殺は「天上界に対する地獄の反逆に永久に奉仕することに、彼が自らの身を捧げたことを意味している」(Miller 101)。またリチャード・ハーター・フォグは、ブランドが「許されざる罪」を自分のなかで発見したとき、「彼の任務は達成され、彼の人類からの孤立も最高潮に達したので、彼にはもはや死ぬこと以外に道はなく、それは完全なる分離の象徴としての死なのだ」(Fogle 47)と述べている。一方、これに対立する少数派の見解として、ブランドはそもそも「許されざる罪」を犯していないというものがある。つまり、彼は世界中を旅しても「許されざる罪」を発見できなかったため、自分をその罪人に仕立て上げることで探求の失敗をごまかそうとしているというのである。マーク・ハリスの意見はその最たるもので、彼によるとブランドは「許されざる罪」を見つけ損なった失望から自

殺したにすぎず、したがって「イーサン・ブランドには人並み外れたところもなければ、格別邪悪なところもない」(Harris 76)という。これら二つの議論は、今からおよそ半世紀ほど前に活発におこなわれたようだったが、最近の研究で「イーサン・ブランド」が本格的に扱われることは比較的まれになっている。しかし、もちろんこれはこの作品がもう十分に論じ尽くされているということではない。この小論の目的は、主人公ブランドが人の心をもたない知性の塊のような男として一般的に理解されてきたことに関して、彼の問題が知性というよりもむしろ心にあるのではないかということを示し、ホーソーンがブランドの死をとおして彼の救済の可能性を暗示していることを明らかにすることで、この短編の読み直しを図ることである。

「許されざる罪」と知的好奇心の問題

冒頭で確認したとおり、ホーソーンは創作ノートのなかで「許されざる罪」の定義について考える際、その罪を、あるべき人間の情から切り離されて暴走する知的好奇心の問題として捉えていた。ホーソーンがそこで用いている表現はきわめて控えめなものなので、たぶん、彼は定義というよりも比較的ゆるやかな仮定のつもりで書き記したのかもしれない。いずれにしても、「イーサン・ブランド」を執筆する段になって、ホーソーンはその仮定をもっと確かなものとして読者に示そうとしているように見える。作品のなかでは、イーサン・ブランドが人間らしい心を失い、知性だけの存在になってしまったかのような見方が、語り手やブランド自身の言葉をとおしてかなり明確に提示されているからである。たとえば、石灰焼き職人のパートラムがイーサン・ブランドに向かって、おまえが見つけたという「許されざる罪」とはいったいどういう罪なのかと問うたとき、ブランドは、「人に対する同胞意識も神に対する畏敬の念も打ち負かし、それ自体の強力な要請のためにすべてのものを犠牲にしてしまった知性の罪」(SI 90)だと答えている。そして語り手もまた、ブランドが知的領域においてはどんな学者も及ばないほどの高みに登り詰めたことを語ると、「しかし心はどこへ行ってしまったのだろうか？それはしなびて、収縮し、固くこわばり、そして死に絶えたのだった！」(SI 99)と述べる。これらの発言は、物語の結末部分に描かれている奇妙な現象によっていっそうの真実味を与えられているようである。ブランドが石灰窯の炎に身を投げて死んだ翌朝、眠るような格好で窯の底に横たわっている彼の遺骸をパートラムが発見する。不思議なことに、焼け残ったブランドの遺骸はすべて真っ白な石灰に変わっており、肋骨のあいだには心臓の形をした石灰の塊が転がっている。パートラムはその光景に半ば困惑し、イーサン・ブランドの心臓はあたたかな血の通った人間の心臓ではなく、冷たい大理石でできた心臓だったのだろうかと言葉を上げる。この出来事は、ブランドが探究の過程で文字通り石のごとく冷え切った心の持ち主になってしまったこと、つまり彼の人間性がまったく死に絶えてしまっていたことを示すもっとも強烈な表現として機能している。

作品のもつこのようなある種の単純さのために、イーサン・ブランドは知性の肥大化によって、やさしさや慈しみの情どころか心そのものをまるごと失ってしまった男として、しばしば多くの読者や批評家から理解されてきた。そして、「許されざる罪」とは「知性」が「心」を切り捨てて一人歩きを始めた状態のことではないだろうかという、ホーソーンがノートに書き残した考えは、仮説というよりも確かな定義であるかのように受け入れられる傾向が一般的には広まっているように見

える。そのもっとも典型的な例を、わたしたちは1950年に発表されたドナルド・リンジの論文のなかに見出すことができる。下記の引用のなかで、リンジはイーサン・ブランドの心がすっかり消滅してしまったことをかなり強い口調で説明している。

[...] イーサン・ブランドのような男たちは人類に対して完全に背を向けており、その孤立のなかで心がとうとう石になってしまったのである。そして心が完全に死に絶えると、知性は完全なる支配権を獲得し、個人が人間理解を通じて悔悛と深い洞察へと至る可能性をことごとく破壊し尽くすのである。許されざる罪とは、頭と心が完全に分離した結果のことなのだ。(Ringe 122)

リンジほど極端な表現を用いることはないにしても、彼がここで述べているのと同様の見解を、エリック・ゴールドマンやウェンディ・パイパーといった最近の研究者たちは、ほとんどそのまま踏襲するかたちでそれぞれの新たな議論の枠組みのなかへと組み込んでいっている。たとえば、ゴールドマンは2004年に発表した論文のなかで、イーサン・ブランドが犯したという「許されざる罪」のことを「科学の罪、あるいは、人間の精神の聖域を犯す恐れのある知的好奇心の罪」(Goldman 43)と呼んでいるし、パイパーは2011年に出版した本のなかで、もっと手短かに、「心に対する知性の勝利」(Piper 37)と呼んでいる。

しかし、そもそも心が完全に死んでしまうというのはいったいどういうことなのだろうか？ホーソーンは、いくら寓意的な物語のなかとはいえ、ブランドをまるっきり知性の塊として描いており、彼の罪が知性に由来するものだと考えていたのだろうか？「空想の見世物箱」(“Fancy’s Show Box”)のなかで、ホーソーンは、あらゆる罪悪は人間の心から生み出されるものであり、罪とは「魂についた染み」(TT 220)なのだということを力説している。また「地球の大燔祭」(“Earth’s Holocaust”)においても、心こそ「人間の過ちの根源が宿るちいさな、しかし無限の領域」(MOM 402-03)であり、知性はその底知れない深淵を征服せんと無益に足掻いている「あの非力な道具」(MOM 403)にすぎないと述べている。これらの作品で示された考えはどこへ行ってしまったのだろうか？この点に関して、ニナ・ベイムはいまからおよそ半世紀ほど昔に同様の疑問を抱き、上で紹介した大多数の見解とは真っ向から対立する議論を展開したことがあった。彼女は、イーサン・ブランドや『緋文字』のチリングワース、「あざ」に登場する科学者エイルマーなど、いわゆる「知性の罪」を犯したと一般的に言われているホーソーンの罪人たちについて、「彼らのうちで知識や科学への情熱に突き動かされている人は一人もいない。きわめて限定された意味合いにおいても、彼らは知性の罪人などではない」(Baym 36)と断言したのである。ベイムによると、イーサン・ブランドは自分が「許されざる罪」を犯していると言うことで、全能であるはずの神の許しの力の限界を証明する存在となり、自らの神性を主張しようとしているのである。したがって、ブランドは知的好奇心に駆り立てられているかのように勝手に思い込んでいるだけで、実際には度を越した自己愛のために動いているに過ぎないというのだ。

イーサン・ブランドを知的怪物として必ずしも単純化することができず、彼が犯したという「許されざる罪」が、本質的には知性というよりも心の問題であるという点においては、ベイムの指摘は的を射ている。しかし、実験材料となった人間の精神を破綻させることも厭わないような情け容赦ない探究へとブランドを駆り立てたものが、人の心に潜む悪に対する旺盛な知識欲であったとい

うことを否定することはできない。この点について考える際に、ホーソーンの「許されざる罪」と、聖書で語られている人類の原罪とのあいだに見られる類似点について触れている高島清氏のコメントは、重要な洞察をもたらしてくれる。知ってのとおり旧約聖書の「創世記」には、知識の木から実をとって食べれば善と悪を知ることができるようになり、神のようになるだろうと蛇に教えられたイヴが、その誘惑に負けてアダムとともに知恵の実を食し、二人して神との約束を破ってしまうというエピソードがある。下記の引用で高島氏は、イヴの行為の根底に彼女の人間的な弱さだけでなく、好奇心というもっと能動的な力の存在を認めている。

蛇の誘惑があったにせよ、イヴが神の命に反して知恵の実を食したということは、イヴに蛇の誘惑を受け入れる下地としての好奇心があったからである。禁じられていたことを意志の薄弱さのために破り犯したという解釈はむしろ2次的、補足的なものである。(153)

つまり好奇心というものは、キリスト教的価値観のなかではそれ自体で本質的に神への反抗の意図を示すものであり、強い自己愛の表れとして理解されうるものだと言えるのではないかと思う。ホーソーンは、人間の好奇心のもつこうした悪魔的な側面を、たぶん直感的に理解していたのだろう。なぜなら彼の作品のなかでは、たいていの場合、好奇心は人を危険から救い出したり、何らかのよい結果をもたらしたりするのではなく、罪に染まった苦しい運命へと登場人物たちを導くために働いているからである⁵⁾。いずれにせよ、イーサン・ブランドを悪の探究にのめり込ませたものが知的好奇心であり、なおかつ好奇心が人間性に深く根差しているものであるなら、ホーソーンの考える「許されざる罪」とは、異質な人間が犯した異質な罪というよりも、ある意味ではきわめて人間的な罪として考えることができるのではないだろうか。

イーサン・ブランドの死と救済について

さて、イーサン・ブランドの心が、語り手の説明や一般的な見解とは異なり、必ずしも死に絶えてしまったとは言えないのだとしたら、彼の陥っている状況はまったく絶望的というわけでもないのかもしれない。ブランドを身勝手な探究へと没入させ、人間同胞から孤立させてしまったものが彼の心だったとしても、悔い改めと他者への深い共感の念をとおして「人類をつなぐ磁力の鎖」(SI 99)のなかにブランドを引き戻し、ひいては彼を神と和解させることができるものも、結局のところ彼の心だけだからだ。この章では、イーサン・ブランドが贖罪を果たし、救済される可能性について探ってみたいと思う。

ブランドの末路については、最初に引用したフォークルらの意見がおおむね定着しているようである。つまり、ブランドの魂は地獄に落ちて永久に神と人から隔てられる運命を辿ることになったのだというものである。たしかに、少なくともストーリーの表面を追っていく限りでは、この解釈は疑いようのないもののように見える。まず、ブランドが最後に飛び込むことになっている石灰窯は、作品の冒頭付近で紹介される際、バニヤンの『天路歷程』に登場する喜びの山々において、羊飼いたちが山を訪れた巡礼者たちに覗きこませたという、地獄の領域へと通じる入口に実によく似ていると説明されている。そして、ブランドがその冥府への入り口のごとき石灰窯のなかに実際に身を

投じようとする場面では、彼はまず窯のてっぺんに上って内部から噴き上がる炎を覗きこむと、悪魔のような形相で両腕を高く持ちあげ、次のように言い放つ。

「ああ、母なる大地よ」と彼は叫んだ。「もはや私の母ではなく、この体があなたのふところに帰ることの決してない大地よ！ああ、人類よ。あなたとの同胞意識を打ち捨て、あなたのその大いなる心をこの足で踏みにじった人類よ！ああ、天上の星々よ。私の前進を促し、高みへと導くかのように、かつて私を明るく照らしていた星々よ！永久にさらばだ！さあ、恐るべき炎の要素よ、これよりさき私の近しい友となるものよ、私を抱くがいい。私がおまえを抱くように！」(SI 100)

イーサン・ブランドは、このように地上と天上のすべてのものたちにきっぱりと別れを告げると、窯に身を投げ入れて凄まじい最期を遂げる。しかもこれで終わりではなく、翌朝、窯の底に横たわっているブランドの骨と心臓を見つけたパートラムが、棹で乱暴にそれらを打ち砕き、粉々にしてしまう。この結末はいかに、イーサン・ブランドにとどめの一撃が刺されたかのような印象を読者に与えることだろう。

しかし、ブランドの死が人類や天上世界からの永遠の分離を意味しているのであれば、彼の自殺のシーンの直後に現れる奇妙に神々しい夜明けの風景をわたしたちはどのように理解すればよいのだろうか？重苦しい空気が垂れ込めていたブランドの死んだ夜とは対照的に、その翌朝はほとんどあからさまなほど黄金の光が強調されており、山々は金色の朝日に照らされ、山間の小さな村にたつ教会の尖塔もまた、その光のなかで金色に輝いている。そしてこうした風景描写に交じって、次のような、なんとなく意味深長な言葉が語り手の口から語られる。

古いグレイロックの山は、金色に輝くひとひらの雲をてっぺんに頂き、荘厳さをたたえていた。周囲にそびえ立つ山々の中腹にも、風変わりなかたちをした白いもやの塊があちらこちらに散らばっていた。その幾つかはずっと下に見える谷間にたれこめ、別の幾つかは山々の峰高くにかかっていた。また、ずっと上空の金色に光る大気のなかにも、雲とももやともつかぬ同様の塊が幾つも浮かんでいた。まるで、山々にかかる雲をわたり、そこから空の高みを流れる雲の上へと進んでいくことで、人が天国の領域へと昇っていけるかのように見えた。大地は空と渾然一体となり、その情景はさながら白昼夢のようであった。(SI 101 下線は筆者による)

注目したいのは下線を引いた部分である。語り手はここで、連なる雲を伝っていけば、人間が天国へと昇っていけるかもしれないという夢に耽っているが、彼はなぜこのようなことを言っているのだろうか？

結末におけるこの不思議な希望に満ちた朝の描写が、イーサン・ブランドの陰惨な死とどう関係しているのかという点については、これまであまり触れられないか、あるいは触れられたとしても、もっぱら、明白な対比によるアイロニーとして説明されるだけであった⁶⁾。しかしここで思い出したいのは、物語の舞台となっている山岳地帯が、おもに大理石で形成されているということである。作品の冒頭付近で、語り手はグレイロックとその周辺の山々に点在している石灰窯について説明する際、「その地方一帯には同様の石灰窯が数多くあり、それは山々の大部分を形作っている白大理石

を焼くためであった」(SI 84)と述べている。イーサン・ブランドが死を遂げた大地が大理石で成り立っていたということは、ブランド自身の心臓や骨もまた同じ大理石でできていたらしいということと考え合わせると、先に引用したブランドの言葉とは裏腹に、彼の体が少なくともこの地方の大地に帰ることはできるかもしれないということを示唆しているように思われる。そして、このように考えることではじめて、空と大地を分かち境界線が朝もやによってぼやけ、あたかも地上の人間が雲をわたって天上世界へと昇っていけそうに見える」と述べた語り手の言葉の意味が、明白になってくるのではないだろうか。ホーソーンはこうすることで、ブランドの罪がもしかすると許されて、彼の魂が救われることもあるかもしれないと言いたかったようである。イーサン・ブランドの「ブランド」(“brand”)という名前は、基本的には「罪人に押す焼き印」という意味を考慮に入れて付けられたものだろう⁷⁾。しかしこの言葉には「燃えさし」という意味もあり、聖書のなかでは「火から取り出された燃えさし」(“a brand out of the fire”)という有名な語句が、「罪の報いから救済された人」という意味で用いられている。灼熱の炎のなかから奇跡的に燃え残ったブランドの心臓は、まさに、「火から取り出された燃えさし」と呼べるかもしれない⁸⁾。

ただし、贖罪には偽りのない改悛の念が伴わなければならないはずだが、ブランドが悔い改めたことを示す明白な証拠は、困ったことにテキストのなかには見当たらないということは認めなければならない。それどころか、彼はどう見ても自分の罪を誇りに思っているようだし、死ぬ間際などは、もはや積極的に地獄へ赴こうとしている始末である。こういう手に負えない強情さのために、彼はホーソーン的意味合いにおいてだけでなく、キリスト教的意味合いにおいても「許されざる罪」を犯していると言えるのかもしれない。「許されざる罪」はもともと聖書に出てくる概念であり、聖霊に対する冒瀆のことをいうが、もっとも厳密には、悔い改めようとしない頑なな心のことを意味しているからである⁹⁾。もし仮に、このようなブランドにまだ改心の余地があるとするなら、それはとてもささやかな事柄のなかから辛うじて推測されるものにすぎない。たとえば、なぜブランドは自分のことを罪人だと考えるようになったのだろうか。彼はチリングワースがそうだったように、人間の心に宿る悪への衝動を知的探求の対象とした結果、自分がまるで悪魔のような男になってしまったことに気づいている。このような気づきは、エイルマーやラパチャーニ博士には(少なくとも物語のなかでは)訪れなかったものだ。人間の心に対する敬意のなさこそ罪であり、しかも許されないほど重大な過失だとブランドが考えたことは、心というものが彼にとって何よりも神聖なものであり続けたことを逆説的に物語っている。だからこそ、彼は自分が破滅させた少女の父親の目をまともに見ることができなかったのではないだろうか。ブランドはエスターという娘を心理実験の材料にした挙げ句、「彼女の魂をすり減らし、消耗し、そしておそらく滅ぼしてしまった」(SI 94)と言われている。エスターの消息について彼女の年老いた父親が熱心に尋ねたとき、それまで数多くの人間の心は無遠慮に覗き込んできたブランドの目は、その老人の弱々しく定まらない眼差しのもとで「ひるんだ」(SI 94)のだった。ブランドはたしかに、エゴイスティックな欲求のために人の心を踏みにじったのだったし、ホーソーンが彼のそうした非情さを「許されざる罪」として書いていることに変わりはない。しかしそれでも、ブランドの心に後悔の念のようなものが少しでもあったのだとすれば、彼の贖罪の可能性は必ずしも皆無ではないのかもしれない。

おわりに

ホーソーンはイーサン・ブランドと同様に心が死に絶え、人間同士のあたたかな愛情と共感の輪から完全に孤立してしまったと言われる男を、「骨董通の収集品」(“A Virtuoso's Collection”)という短編においても登場させている。そこでは、感受性が麻痺し、人間らしい感情を感じなくなってしまう骨董通の男に向かって、語り手が次のような言葉をかける。

「あなたの運命はまったくもって恐ろしいものですね！ [...] でもたぶん、天上のものである精神はこの地上の生活のどんな汚濁にまみれても、どんな寒さにさらされても、完全に死に絶えたりはしないのではないかしら。たぶん、永遠に消え入ることのないきらめきが、天の息吹に触れて再び灯されるのではないかしら」(MOM 495)

この考えは、次の瞬間には実にあっさりと撤回されてしまう。というのは骨董通の男が、このような慰めの言葉を聞いても心を動かされる様子もなく、勝ち誇ったような冷やかな笑みを浮かべているのを見て、語り手が、ああ、やっぱりこの人の魂はこの人の内側で死んでいるのだと確信するからである。しかしホーソーンは、いかに精神が孤立し、冷え切ってしまったとしても、人は人間同士の内なる絆からそう簡単に締め出されることはなく、愛する力や過ちを悔い改める力というものは、再び取り戻されるのではないだろうかという考えを捨てることができなかったのだろう。「イーサン・ブランド」では、そのような考えが上述の作品とは違ったかたちで表現されているようである。

ホーソーンは作品のテーマの暗さゆえに、しばしば陰鬱でペシミスティックな作家のように思われがちだが、こういった点に、人間性の善良さを信じようとするこの作家の本質的な陽気さを垣間見ることにはできるかもしれない。また、丹羽隆昭氏が論じているように、「許されざる罪」がホーソーンにとって一種の自己批判の表れであったことも考慮に入れておかなければならないだろう。「人間の心の真実」(HSG 1)を忠実に描くために、その内奥に蠢く闇を冷徹に見極めようとしながら、ホーソーンは人間の魂に対する自らのそうした批評的な態度に強い疑問を感じていたようだった。もちろん、過ちを犯す運命から逃れられない人の弱さやかなしみに、彼が深い共感を寄せていたことにちがいはない。しかし、どこかしらピューリタンの厳しさをもつホーソーンの良心にとって、彼の態度が示している一種の傲慢さは、ともすれば人間同胞や神との神聖な絆を冒瀆する恐れのあるものとして映ったのだろう。人の心を覗き込み、そこから容赦なく悪辣な本性を引きずり出そうとするイーサン・ブランドは、ある意味では、ホーソーンのそうした自意識を具現化した姿であり、ブランドを「許されざる罪」の罪人と呼ぶことで、ホーソーンは自らをかなり手厳しく批判しているのである。しかし一方で、もし、ブランドが最後に贖罪のチャンスを与えられているのだとすれば、そこには、自らの傲慢さへの許しを願うホーソーンのひそかな思いが込められていると考えることもできるのではないだろうか。

本稿は、2013年9月に開催された日本アメリカ文学会関西支部9月例会において口頭発表した原稿に、加筆修正を加えたものである。

注

1) ホーソーンからの引用はオハイオ州立大学版の全集によるものとし、引用後、タイトルとページ数を括弧内に記す。タイトルは以下の短縮版を用いる。

AN *The American Notebooks*
 HSG *The House of the Seven Gables*
 L *The Letters, 1843-1853*
 MOM *Mosses from an Old Manse*
 SI *The Snow-Image*
 TT *Twice-told Tales*

2) 「イーサン・ブランド」は、1851年に短編集『雪人形』(*The Snow-Image*)に収録される際、現在のようなタイトルに変更され、失敗した長編小説の一部である旨を伝える副題が付与された。ホーソーンは当初、この作品を「許されざる罪」とだけ呼んでおり、はじめて『ボストン・ウィークリー・ミュージアム』に掲載されたときも、やはりその言葉がタイトルとして用いられた。しかしこの新聞への掲載については、ホーソーンはかなり不満を抱いていたようである。彼は、そのころ執筆中であった『緋文字』を中心に据えて一冊の物語集を作ろうと計画しており、そのなかに「許されざる罪」も収録するつもりだった。しかし1849年の冬、ウェバーはホーソーンの制止を無視して「許されざる罪」を『ミュージアム』紙に譲渡し、作品は翌年の紙面を飾ることとなった。余談になるが、ウェバーがこの件に関してホーソーンに原稿料を支払ったという記録は残されていない。「イーサン・ブランド」発表の経緯に関しては、SI巻末に付された“Historical Commentary”の382-85ページを見よ。

3) ホーソーンは「イーサン・ブランド」以外でも、1852年に出版した彼の第三の長編小説『ブライズデイル・ロマンス』(*The Blithedale Romance*)のなかで、一度だけ「許されざる罪」というキーワードに言及している。おそらく、博愛主義者ホリングズワースの過ちを描くことでこの主題を前面に押し出そうとしたのではないと思われるが、ホーソーンに関心が物語の進行とともに語り手カヴァデールのほうに移行しがちで、あまりうまく展開できていないように見える。

4) 1846年に出版されたホーソーンの一つ目の短編集『旧牧師館の苔』(*Mosses from an Old Manse*)の序文のなかで、ホーソーンは短編や随想といった小品ではなく、それ自体で立派に立ってられるような小説を書きたいという気持ちを吐露している。また編集者エバート・A・ダイキンクに宛てた手紙のなかでも、短編小説を書くことをやめるつもりであることを告白している(L139)。しかし実際のところ、ホーソーンは経済上の理由で1846年の4月からセイレムの税関で働くこととなり、役人生活は彼の創造的精神を少なからず萎えさせしまったようである。翌年の秋、彼は同窓の友人ロングフェローに次のようにこぼしている。「いま、ぼくはなんとかもう一度ペンを取ろうとしているところです。でもぼくが置かれている状況や、いつも付き合っている連中の影響はあまりに反文学的だから、うまくいくかどうか分かりません」(L215)。

5) たとえば「若いグッドマン・ブラウン」(“Young Goodman Brown”)では、主人公グッドマン・ブラウンが悪魔と連れ立って魔女の集会に出かけていくが、彼が集会に参加しようと思立ったのは、具体的な理由は何であれ、悪の世界を覗き見たいという好奇心を抱いたからにちがいない。ブラウンは集会の夜を境にすっかり陰気な人間に変貌してしまい、残りの人生をなんの喜びもないまま送ることになる。また「ラパチーニの娘」では、青年ジョヴァンニが有毒な身体をもつ娘ベアトリスに近づいた結果、彼女を死なせてしまうばかりか、自らは彼女と同様の毒人間と化してしまう。ジョヴァンニが医学生であることを考慮するなら、彼がベアトリスに近づいた動機は、彼女の肉体に備わった邪悪な力への学問的好奇心だったのではないかと推測することができる。

6) たとえば、Harris 76-77、Marx 438、松阪 178-79 ページを見よ。

7) 丹羽 38-39、松阪 187 ページ。

8) ゼカリヤ書 3章 2節を見よ。

なお、ブランドの名前とこの聖書の語句とのあいだの関連性については、松阪仁伺氏の論文からヒントを得た。しかし松阪氏は、ブランドの名前をホーソーンの言葉遊びによるものと考えている。つまり、ブランドが石灰窯の火のなかに飛び込む行為は、「火から取り出された燃えさし」という文句を逆転させた

ものであり、改悛に対する彼の頑なな拒絶を表しているという (187-88)。

9) 聖書には「許されざる罪」という言葉そのものは出てこないが、その罪についての言及はマタイ伝 12 章 31-32 節などに見られる。ジョーゼフ・マカレンとジョン・ギルズの共同研究によれば、たとえ聖霊を冒瀆しても、心から悔い改めればその罪は許されるという見解を、異なる時代や宗派の神学者たちが異口同音に唱えている。神の慈悲はあくまで無限のものであり、罪人が許されないとすれば、それは彼らが自分たちの感情や考えに固執して、その慈悲を受け入れることを拒んでいるからにすぎないというわけである (McCullen and Guilds 223-24)。ホーソンの考える「許されざる罪」は、どちらかという神に対する敬意というよりも人間に対する敬意のほうに重点が置かれている点で、本来の「許されざる罪」とは微妙に異なるようだが、結局は自分の考えを曲げようとしない強情さを指しているという点で、たぶん、本質的に一致している。

参考文献

- Baym, Nina. "The Head, the Heart, and the Unpardonable Sin." *The New England Quarterly*. 40 (1967): 31-47.
- Fogle, Richard Harter. *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark*. Norman: U of Oklahoma P, 1964.
- Goldman, Eric. "Explaining Mental Illness: Theology and Pathology in Nathaniel Hawthorne's Short Fiction." *Nineteenth-Century Literature*. 59 (2004): 27-52.
- Harris, Mark. "A New Reading of 'Ethan Brand': The Failed Quest." *Studies in Short Fiction*. 31 (1994): 69-77.
- Hawthorne, Nathaniel. *The American Notebooks*. Ed. Claude M. Simpson. Columbus: Ohio State UP, 1972.
- . *The House of the Seven Gables*. Columbus: Ohio State UP, 1965.
- . *The Letters, 1843-1853*. Ed. Thomas Woodson, L. Neal Smith, and Norman Holmes Pearson. Columbus: Ohio State UP, 1985.
- . *Mosses from an Old Manse*. Columbus: Ohio State UP, 1974.
- . *The Snow-Image and Uncollected Tales*. Columbus: Ohio State UP, 1974.
- . *Twice-told Tales*. Columbus: Ohio State UP, 1974.
- Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. New Haven: College & University P, 1965.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. New York: Oxford UP, 1967. 265-77. Rpt. in *Nathaniel Hawthorne's Tales*. By Nathaniel Hawthorne. Ed. James McIntosh. New York: Norton, 1987. 432-39.
- McCullen, Joseph T. and John C. Guilds. "The Unpardonable Sin in Hawthorne: A Re-Examination." *Nineteenth-Century Fiction*. 15 (1960): 221-37.
- Miller, James E. Jr. "Hawthorne and Melville: The Unpardonable Sin." *PMLA*. 70.1 (1955): 91-114.
- Piper, Wendy. *Misfits and Marble Fauns: Religion and Romance in Hawthorne and O'Conner*. Macon: Mercer UP, 2011.
- Ringe, Donald A. "Hawthorne's Psychology of the Head and Heart." *PMLA*. 65.2 (1950): 120-32.
- 高島清. 「『許されざる罪』の本質」『立命館経済学』46.5 (1997): 149-157.
- 丹羽隆昭. 『恐怖の自画像—ホーソンと「許されざる罪」』英宝社, 2000.
- 松阪仁伺. 『ホーソン研究—前テキストの美学』旺史社, 1995.

(本学大学院博士後期課程)